

【北朝鮮】

人民大衆の娯楽としてのサーカスと映画

門間貴志

サーカスと映画

文化大革命のさなかの中国で、イタリアのミケランジェロ・アントニオーニ監督は、三部構成の長編ドキュメンタリー映画『中国』を撮った。彼を中国に招いて映画を撮らせたのは毛沢東夫人の江青だった。この映画は北京、上海をはじめいくつかの都市で人民の日常生活取材したもので、そこに監督自身の声でコメントリーがかぶせられている。文革の熱狂はすでにそのピークを過ぎたところで、街の様子は平穏に見える。田舎から首都北京に押し寄せてき

た紅衛兵たちが、我がもの顔で街を闊歩し、あたりかまわずゴミを撒き散らしていた時期もあったが、秩序回復しているようである。だからこそ外国人の映画監督に取材をさせたのであろう。しかし完成した映画は、中国の醜い部分を伝えようとしたと人民日報で激しく批判され、中国で上映されることはなかった。

この映画の第二部の終わりに、小さな劇場で子供たちが人形劇を観ている場面がある。しかしカメラは観客席に申しわけ程度に向けられただけで、あとはひたすら人形劇そのものを延々と映し出す。第三部の終盤にはすでに日本でもおなじみとなった上海の雑技団が登場する。雑技とは中国式のサーカスであり、皿回し、ジャグリングをはじめ、シーソーを用いた跳躍のアクロバットなど、シンプルだが高い技術に裏付けられた技が次々と繰り出される。ここでも観客の様子は映し出されることはなく、ひたすら雑技の舞台を映し出す。ナレーションや字幕による説明はない。

江青が中国文芸界を支配していた文革期、劇映画の制作はほぼ停止状態にあり、上映されていたのは一部の旧作、そして北朝鮮、北ベトナム、ルーマニア、ブルガリアなどの友好国の映画が主だった。この当時、都市部に暮らす人民が享受する娯楽として、人形劇や雑技の人気は高かったのである。

サーカスはしばしば映画の題材となってきた。視覚的な

面白さもさることながら、サーカス団の人間関係や、華やかなショーの背後にある悲哀などが描かれた。アメリカであれば、『曲馬団のポリー』やチャップリンの『サーカス』、イタリアならばフェリーニの『道』などが思い浮かぶ。ソ連映画では『サーカス』が知られ、この映画で使われた曲が後にポリシヨイサーカスのテーマ曲となった。サーカスの映画は枚挙に暇がない。旅巡業をするサーカス団はどこへ行ってもよそ者であり、芸人はもともと買われたりした子どもだなどといういわれのない偏見に晒されたりもした。詩人の中原中也も、『サーカス』という悲しげな詩を残している。

北朝鮮でもサーカスは娯楽の重要な位置を占めている。北朝鮮ではサーカスを「技巧」と「曲芸」を合成した造語で「巧芸」と呼ぶ。巧芸は社会主義的文学芸術の一つとして位置づけられ、チュチェ文芸の三原則の党性・人民性・階級性をそのまま適用している。一九五二年に設立された国立の平壤巧芸団と、朝鮮人民軍の経営する牡丹峰巧芸団があり、世界大会で入賞するなど技術レベルも高い。日本のサーカスと違うのは、一見モダンな装いを持っているものの、朝鮮古来の遊びや芸能が採り入れられていることである。

北朝鮮のサーカス映画の変遷

北朝鮮にも、サーカスを扱った映画がある。しかし社会主義国である北朝鮮では、西側の映画のように悲哀を込めてサーカスを描いたりはいしない。彼らが社会的に虐げられてきた過去の歴史には言及しても、現在では国家の庇護のもとで芸術として認められ、人民に奉仕しているさまが描かれる。社会主義リアリズム映画の開花した一九六〇年代に撮られた『サーカス広場』はその一例である。登場人物の過去や生い立ちに日本統治時代が暗い影を落とすのである。しかしその方がサーカス映画らしいとも言える。世界のサーカス映画には、たとえば曲芸師が孤児であるというような暗い設定は珍しくないが、『サーカス広場』はその原因として日本帝国主義を設定するのである。

北朝鮮の映画は、日本では商業ベースではほとんど公開されてこなかった。かつては朝鮮総連が主催する上映会が頻繁に開かれ、『血の海』や『花を売る乙女』などの抗日映画を観た日本人も少なくないだろう。植民地支配からの解放後、朝鮮半島北半部はソ連の占領を経て社会主義国としての整備が進み、朝鮮民主主義人民共和国が成立した。その過程で映画もソ連映画の圧倒的な影響を受けてきた。一九六〇年代には、ソ連や中国経由で外国映画の理論も研究されていたようで、映画人はネオリアリズムやヌーベルヴァーグなど、西側の映画の動向もある程度知っていた。

社会主義の優位性を盲目的に歌い上げるだけではない映画もこの時期に撮られていた。しかし中国の映画雑誌に紹介されているこの時期の北朝鮮映画の多くは、現在の北朝鮮側の資料で確認することができない。恐らく政治的な理由で封印されたものと思われる。この時期の代表的な作品の一本である一九六六年の『陽気な舞台』は、DVDなどの方法で現在も観ることができ、比較的自由でのびやかだった北朝鮮映画の幸福な時代を想像させるのである。パルチザン派を率いていた金日成は、一九六七年に最後の政敵グループだった甲山派を肅正する。実利を重んじた甲山派は人民の生活を安定させるため軽工業の優先を主張したが、戦争準備に余念のない金日成は重工業優先を主張していたのである。甲山派は映画をはじめとする文学芸術分野に多くの人脈を築いていたために、映画人も大粛清の影響を受けた。

『陽気な舞台』は、平壤のサーカス団に勤めているヴァイオリン奏者の青年を主人公としている。映画は実際のサーカス団を使って撮影されており、アクロバットの妙技を披露するのは本物の曲芸師たちである。サーカス劇場が連日多くの観客でにぎわっている様子も映し出される。これはもちろん撮影のために用意されたエキストラであろうが、やはり映画と並ぶ娯楽の王様である雰囲気がかがえる。

主人公のジンギユはひよんなことから道化師の代役を務めることになり、女性曲芸師のヨンジャとともに小さなゴンドラに乘せられ高く吊り上げられる。恐怖のあまり目を閉じてゴンドラにしがみついているうちにシヨは終わる。地上に降りた彼は、よたよたとへっぴり腰で歩いて観客の笑いを誘う。サーカスを観に来た恋人のヨンスクは、道化師のメイクをした彼に気がつかなかった。一度きりの代役だったはずが、ジンギユの道化ぶりが思いのほか好評だったため、道化師に配置転換されてしまう。彼はそれを恋人に打ち明けられない。一方、ヨンスクの兄の作曲家ジョンピルは曲芸師のヨンジャに一目惚れする。彼女は道化師となったジンギユの相手である。ジョンピルはジンギユを交響楽団に迎え入れようとサーカス団を訪れる。練習を見学しているうちにうっかりと空中ブランコで吊り上げられてしまった彼を助けたのは道化師のメイクをしたジンギユだったが、もちろんジョンピルは気がつかない。やがてジョンピルは家族に内緒でヨンジャとの交際を始める。劇場のロビーでデート中に、偶然母と妹と鉢合わせした彼は隠れてしまう。ヨンジャは彼の態度からヨンスクを彼の本当の恋人だと誤解してしまう。一方ジンギユも道化師になったことをヨンスクに告白する。さまたまなすれ違いから起こった混乱は、最後にはすべておさまリ、二組のカップルはめでたく結ばれる。ジョンピルが作曲した

サーカスのテーマ曲をステージで颯爽と歌い上げる道化師のジンギユは大人気となる。

よく練られたコメディ映画で、スクリーンボール・コメディのような雰囲気もある。スクリーンボール・コメディとは、定義上は変人（スクリーンボール）が織りなす恋愛コメディ映画をさす。その意味では彼らはそれほど変人には見えないが、北朝鮮社会では十分に風変わりな人たちなのかもしれない。

主人公のジンギユが嫌がっていた道化師の仕事に誇りを持つようになるという設定は、社会主義国家では、職業に貴賤はなく、サーカスとは人民に奉仕するものであるという考えに合致したもので、大きな枠では国策に沿ったプロパガンダ映画と言えなくもない。しかしこの軽快な映画は教条的な匂いを感じさせない。そもそも北朝鮮映画につきものである指導者を讃えるセリフがない。甲山派の粛正後、金正日による改革によって北朝鮮映画は金日成の個人崇拜に舵を切り始めた。一九七二年の『空中舞台』は、農場で働くヒロインがサーカス団員を目指し、反対する周囲の人々の理解を徐々に得ながら夢を実現していく物語であるが、コメディ色は抑えられ、体制を讃美する傾向が強くなっている。金正日の改革以降（韓国の申相玉監督の起用を例外とすれば）個人崇拜に寄与させられてきた北朝鮮映画にあって、『陽気な舞台』がいかに自由な雰囲気を持つ

ていたかがわかる。

二〇一二年に外国からの注目を集めた北朝鮮映画『金同志は空を飛ぶ』は、イギリスとベルギーとの合作で、これもまたサーカスをテーマとしている。炭鉱で働く明朗快活な女性が子供の頃から空中ブランコ乗りを夢見ている。職場でもアクロバットを披露して同僚たちから可愛がられている彼女は、平壤の建設現場に配置換えになったのを期にサーカス団の門を叩く。気恥ずかしくなるほどストレートな青春コメディ映画である。ヒロインを演じているのは実際のサーカス団員である。映画スターを目指す映画よりもサーカスの映画が繰り返されるのは、それが大衆の夢の世界であることを象徴している。さらに、『陽気な舞台』でヒロインを演じた女優がここではヒロインの祖母を演じているのは、映画による映画史への自己言及であり感動すら覚える。

映画リスト

『曲馬団のポリー』……① Polly of the Circus、②チャールズ・

ボラン、エドウィン・L・ハリウッド、③一九一七年、④アメリカ、⑤サイレント、⑥未公開。

『金同志は空を飛ぶ』……① 김동무는 하늘을 난다、②キム・

グアンフン、ニコラス・ボナー、アーニヤ・ダールマンス、

③二〇一二年、④北朝鮮、イギリス、ベルギー、⑤朝鮮語、

⑥未公開。

『空中舞台』……①공중무대、②キム・ドッキュ（金徳奎）、③一九七二年、④北朝鮮、⑤朝鮮語、⑥未公開。

『サーカス』……①The Circus、②チャールズ・チャップリン、③一九二八年、④アメリカ、⑤サイレント、⑥劇場公開（一九二八）、DVD販売。

『サーカス』……①Illyk、②グレゴリー・アレクサンドル、③一九三六年、④ソ連、⑤ロシア語、⑥未公開。

『サーカス広場』……①교예무대、②監督不詳、③一九六三年、④北朝鮮、⑤朝鮮語、⑥未公開。

『血の海』……①피바다、②チュ・イッキュ（崔益奎）、③一九六九年、④北朝鮮、⑤朝鮮語、⑥未公開。

『中国』……①Chung Kuo, China、②ミケランジェロ・アントニオーニ、③一九七二年、④イタリア、⑤イタリア語、中国語、⑥未公開。

『花を売る乙女』……①꽃파는 처녀、②パク・ハク（朴学）、チュ・イッキュ（崔益奎）、③一九七二年、④北朝鮮、⑤朝鮮語、⑥未公開。

『道』……①La Strada、②フェデリコ・フェリーニ、③一九五四年、④イタリア、⑤イタリア語、⑥劇場公開（一九五七）、ビデオ・DVD販売。

『陽気な舞台』……①명랑한 무대、②監督不詳、③一九六六年、④北朝鮮、⑤朝鮮語、⑥未公開。

著者紹介

①氏名……門間貴志（もんま たかし）。

②所属・職名……明治学院大学文学部・准教授。

③生年・出身地……一九六四年、秋田県。
④専門分野・地域……映画史／朝鮮半島、中国（香港・台湾）、ベトナム。

⑤学歴……多摩美術大学美術学部芸術学科卒。

⑥職歴……シードホール（西武百貨店渋谷店）キュレーター（一九八六—一九九五）、BOX東中野ディレクター（一九九五—一九九六）、山形国際ドキュメンタリー映画祭東京事務局フィルムコーディネーター（一九九六—一九九七）、明治学院大学文学部非常勤講師（一九九六—二〇〇二）。

⑦現地滞在経験……大韓民国（二〇〇一—二〇一一）。

⑧研究方法……文献収集、映画作品の調査。

⑨所属学会……日本映像学会、日本映画学会。

⑩研究上の画期……山形国際ドキュメンタリー映画祭での上映企画「大東亜共栄圏」と映画」の上映作品選定のため、中国、香港、台湾、韓国のアーカイブをまわり、古い記録映画の情報の収集活動を行ったことは、東アジア映画史研究で大きな進展となった。平壤国際映画祭の視察、旧満映の調査のため長春電影を視察したことも同様である。

⑪推薦図書……石坂健治・市山尚三・野崎敏・松岡環・門間貴志監修、夏目深雪・佐野亨編集『アジア映画の森』（作品社、二〇一一）。

⑫推薦する映画作品……『Mr. Boo! ミスター・ブー』（原題『半斤八兩』、マイケル・ホイ（許冠文）監督、一九七六年、香港）。